

秋田の リーダーに聞く

秋田プライウッド株式会社
取締役 総務経理部長

金田 憲明

Kaneda Noriaki

1972(昭和47)年4月、東京都生まれ。幼少から大学卒業まで神奈川県で過ごす。1995(平成7)年に秋田へ移住、2005(平成17)年33歳で秋田プライウッド株式会社に入社し、現在は同社取締役総務経理部長を務める。父は横手市出身。長年の趣味は史跡巡りで、最近訪れた場所は湯沢市院内銀山跡。近年はゴルフや早朝のフィットネスも楽しむ。

成長し続けることを力に 森林王国・秋田から未来を拓く



●多様な業務を束ねる リーダーとして

国内最大級の生産量を誇る国産材合板メーカーの秋田プライウッド株式会社。その実務面の中核を担うのが、取締役総務経理部長を務める金田さんだ。総務経理を中心に広報、法務労務、経営戦略など、営業・生産以外のほぼすべてを統括し会社全体を支える役割を担う。社内を歩くと、社員や食堂スタッフへ自然に声をかける金田さんの姿がある。「私はブレインストーミングが大好きなんです」という金田さん。日常的なコミュニケーションを大切にし、その場では意見を否定せず、安心してアイデアや意見を出せる環境づくりを重視している。「今の時代、変化を拒むという選択肢はない。人口減少や市場縮小が進む中で、従来のやり方を続けるだけでは成長は望めません」と金田さんは言い切る。社員にも「新しいことに挑戦しよう」と声をかけ、組織全体でブラッシュアップを重ねることが企業の成長に繋がると考えている。私生活では毎朝のフィットネスが日課。大きな手術をきっかけにウォーキングを始めたことが、現在の運動習慣に繋がる。趣味の史跡巡りやゴルフとともに、心身両面で仕事にも良い影響を与えているという。

●地域の課題と未来への挑戦

「秋田の一番大好きなところは、四季がはっきり感じられるところですよ」と話す金田さん。春の桜、夏の海や祭り、秋の紅葉と食冬の雪景色。自然と文化が織りなす豊かさは、他にはない価値だという。一方で秋田県は、年間の出生数が約30000人に対し死亡数が1万7000人以上と深刻な人口減少に直面している。この影響もあり住宅需要は減少し、木材の利用量も低下。その結果、伐採と更新のサイクルが滞り、森林の循環機能にも影響が及んでいるという。「木の二酸化炭素吸収量は成長とともに減っていきます。木を適切に利用し、若い木を育て、森林を循環させていくことが大切なんです」と金田さんは語る。こうした課題に対し秋田プライウッド株式会社は、森林の循環を維持しながら木材利用を広げる新たな提案に取り組んでいる。

●事業そのものがSDG's

同社は森林経営から木材加工までを一貫して手がけ、木を「植える・育てる・収穫する・使う」という循環を重視し、事業を展開している。主力は秋田県産スギなどの国産材による合板製造だ。「合板は軽量かつ高強度な木材で、住宅の床や壁、家具など幅

広く活用されています。近年は、これまで隠れることが多かった合板の断面をあえて、魅せるデザインを家具や壁面に取り入れ、旧社員寮の木質化リノベーションを行うなど、木材の新たな価値提案も行っています。また木材は、見た目の美しさだけでなく、長期間にわたり内部に炭素を蓄え続けることで、環境負荷の低減にも役立つ素材なんです」と金田さんは話す。

その強みを背景に、秋田県、一般社団法人秋田県建築士事務所協会、そして同社は2026年3月27日に「建築物木材利用促進協定」を締結した。この取り組みは、建築分野で秋田県産の木材利用を広げることで、森林資源を循環させながら脱炭素社会の実現を目指すものだ。金田さんは秋田を「森林王国」と表現する。「あえて、王国」という言葉を使ったのは、それだけ誇れる森林資源があるからです。私たちができることは、木を植え、育て、加工すること。そして活用の仕方を提案し、たくさん木を使ってもらおうこと。そうすることで、秋田の森林資源を活かし、循環を守りながら秋田のさらなる発展へとつなげていけると信じています。」金田さんの言葉には、地域とともに未来を切り拓いていこうとする強い意志が込められている。